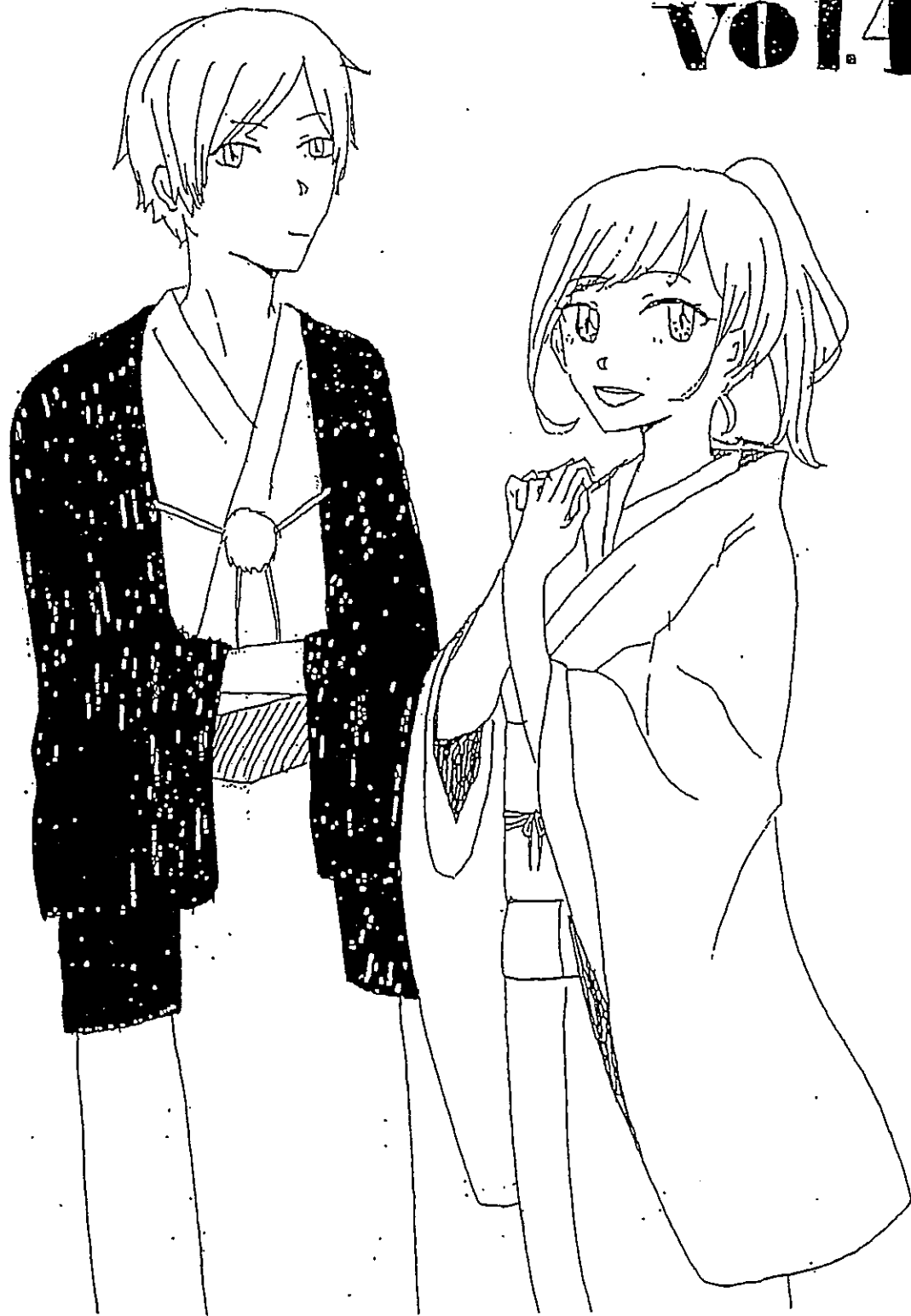


Poltada

vol.45



YA広報誌『ポルターダ』はWebサイトからでもご覧いただけます
稲城市立中央図書館 <http://www.library.inagi.tokyo.jp>
トップページ>利用案内>中高生の方>ヤングアダルト(YA)サービス

あなたの行く年、来る年

もう一年が
終わっちゃうぞ



このテーマを見てまず思ったのは、「かなり濃い一年だったなあ」ということ
 ですね。4月から12月が早すぎて全然実感わいてません...
 というか部活が忙しくて一日が短く感じたんでしょうねーきっと。
 なので来年も同様の感じかと... 新年の抱負ってなんだよ!!
 (もっと画力と学力と演技力が欲しいです)

ではでは良い一年を!



こんな内容ですみません。

「夕スキメシ」

作. 額 繁 零 (913.6x)

この本は政隆によって
 陸上をやめようとしている
 兄、早馬とその兄の走り
 りが好んで陸上を始めた
 弟、香馬 2人の心の様子
 だ。たゞ兄弟であるから
 こを感 じる喜を交わして
 いるお話です。
 とこも読みやすく、面白
 本なので ぜひ読んで
 みて下さい!! (せくみ)



おすすめ本

季節巡るお祝い

お久しぶりです。
 最近冷えたのできましたね

未だプレーヤーナマブラー
 だけや戦っておりませす。
 モリチです。

トレンジャー

この季節は多分見る
 生物が少なそう

ヒサカケミニムシ

デデダン

ヒサカケの中身

おきん出し。

短くつても
 短い

おまけ
 電車がまわりま
 すぐ

スカートを
 下ろせよ。

届け
 への想い。

はむ / 4

ツインドルの箱庭

維野まこ

同じ杖、同じ顔、同じ屋根の下で暮らす双子の魔法使い、
 ずっと一緒だったはずが、ある日姉のツェルが行方不明に...
 手を尽くし探し出す弟のツェルバールと探偵ギルバール、
 2人の前に突然現われた魔女はこう言いました。
 採ムは箱庭売りの魔女エルがいた。もしツェルに
 会いたければ、お前も箱庭を買わないか?」
 おせツェルは箱庭の中に閉じ込められたのか、
 + 箱庭とは何なのか、そしてツェルバールはどうするのか—

ハイセンスな完全フルカラー漫画です。
 死ぬまでに一度は読んでみてほしい!



―番外編 放課後の図書室 その三―

アオイ紅葉

みなさん、こんにちは。高校二年生の平野真美です。私はいつも、ここ白川高等学園の図書室にある私だけの特等席で本を読んでいます。

季節は巡って、コートが必要になる季節となりました。皆さん、インフルエーンザには気を付けてお過ごしくださいね。私はいつも、誰に話しかけてるんだろう……。まあいいや。

時計の針が四時を過ぎたころ、私は今読んでいた本をぱたんと閉じた。

(なに……。この話。すごく、泣けるんですけど……)

ポロポロと涙を流しながら、ポケットに入っていたハンカチを取り出してそれをぬぐった。久しぶりに感情移入をしすぎてしまったのかもしれない。

私が読んでいた本は住野よる作『また、同じ夢を見ていた』です。学校に友達がいらない主人公がいろんな人に出会い、幸せとは何なのかを体験して結論を導き出す感動の一作。

主人公は高校生の私よりもっと下の小学生の女の子。でも、考え方は私なんかよりも大人びていて、あくまでも自分の意見が肯定だという自分に自信がある強い性格の持ち主だ。私のオススメは、主人公が同級生の桐生君と自分の気持ちと戦うために学校に来るシーンかな。ああ……。私にもこんないい友達がいたらな……。なんて。

涙をハンカチで拭きながら本をもとあった場所に戻そうと立ち上がった瞬間、図書室の入り口のドアの音が聞こえた。誰か来たのかなと思ってドアの方を見ると、あんなに流れていた涙が嘘のように止まった。その代わり、鼻血が出てきそうになつて私は思わず、鼻の先をぎゅっとつまんだ。

私の目の前にいたのは、同級生の花百合八千代(はなゆかり)やちよ君と同じく同級生の真由澄焦司(まゆずみ)君だった。二人とも私と図書室で二人つきり状態を経験したこともあり、まさかまたここに来るとは思わなかった。私はずれしさと動揺が絡み合つて頭の中で整理が追いつかない状態になっている。

(うっそ……。また会えるなんて思ってたから、びっくりしちゃったよ。しかも、二人とも来てくれるなんて……。か、感動で……。手が震えてきちゃうよ……)

私は心の中で思っていたことが起こることも知らずに、ただ呆然と二人を見つめてしまっていた。それは時間がゆっくりと流れていくかのような感覚だった。同時に私の手に持っていた本が私の足に直撃にあたるときもその感覚だった。本のとがった部分が足の甲に垂直にぶつ刺さった。

「いっつっつっつっつ！」

ぶつ刺さった瞬間、激痛が足の甲から上半身を駆け巡りツーンと頭に激痛を残させた。声が野太くなってしまううえ、その場で痛さにしゃがみこんでし

まった。目の前にいた二人が私を目をぱちりと瞬きしてから、私をじーつと見てくる。

(完全に……聞かれてた。は、恥ずかしいい)

「ねえ……、んーん。だ、大丈夫？」

「ちよつとやつちー、そんな変な子にかまつてる暇なんてないでしょ？そういういつつも、記念に一枚」

真由澄君は肩からぶら下げていた一眼レフカメラで私の悶えているところを連写で撮った。私はこの年、最高に恥ずかしくて死にたい記念日になった。

(ま、まさか人気な二人とこんな形で関われるとは思わなかったけど、こんなにつて……こんなにつて……ひどすぎないっ！)

私が恥ずかしくと死にたいという気持ちで拳をブルブルと震えさせていると、真由澄君と花百合君が何事もなかったかのように一番奥の席に向かい合わせで座っていた。

(「こんなにつて……あんまりだとは思わないのお！？神様っ！ねえ見てんでしょっ！」)

私が痛さに耐えながらも必死に立ち上がっていると、二人が楽しそうに話し合う声が聞こえた。その話はい最近のクリスマススイブの話だった。

「いやーさ、面白かったよね。みんなで集まってるのクリスマス会」

「だねー。みんなでクリスマスケーキ作ったりしてさ、アリスがミキサのふたを閉じるのをすっかり忘れて、全部のケーキに乗せる果物があっちゃんの顔に飛びちちゃって……ぷっ」

「やめてつてばっ！まゆちゃん……はは……いない人の……こととか。フルーッがぐっしよりとなつてそれが……ぷっ、顔に……あはははははは」

(「っ、っ、っ……性格……わつつるっ！」)
傍から見てもいい話には見えなくて、人の不幸を笑うまさに悪魔のような人たちだった。

(まあイケメンだから……許しちゃうんだけどね)

私は足を引きずりながら近くの席に座ると、真由澄君は何か怖いものを思い出したかのようににぶるつと体を震わせた。

「こんな事……やつぱり、話してちゃ……ダメだよな？」

「なんで？面白いじゃん。普段、人を家畜だと思ってる奴が……ふふ。ははははは。いいさまだよな」

まるで人の悪口を平気で言うような女子たちみたいなのぶりで友達だと思われるあっちゃん？のことをあざ笑う。

(「これが花百合君の本性……なんて……悪い小悪魔だこと」)

「やつちー、素が出てるよ。気をつけて」

「うわっーやばっ」

（うわー。この反応、話題の本人がきた時の反応じゃん……。怖いなあ……。もう）

私は戻そうと思っていた本をまた開いて、目だけは本の中身を見て、耳は二人の話を聞くことに専念した。

「ほーら。そんなことばかり言ってるとうあっちゃんがまた、ブラックサンタになって泥団子を顔にお見舞いされちゃうよ」

（何そのプレゼント！？超いらなっ！）

「それは嫌だなく。だってせっかくの可愛い顔が台無しになっちゃうよお」

「とうかあんな衣装、どこで特注したんだらうね」

「知らないよ。アイツのことだから、また裏のルートで取引したんじゃないの……わかんないけど」

（何その闇取引みたいなノリは）

真由澄君は一眼レフを何やら操作しながら、花百合君に「ねえ」とまた話しかける。

「なに？まゆちゃん」

「その呼び方……。いい加減、気色悪いんだけど……。まあいいや。週末さ、

みんなで餅つきやろうよ」

「どうしたの急に」

眉をビクリと動かしながらも自分のスマホをポケットから取り出して操作しながら、花百合君は真由澄君の話に耳を傾ける。

「いやーあのですね。僕も嫌なんだけど親が町内会の集まりでその取り締

まり係になってしまいましたね。ついだから、僕もついて来いと言われたんですよ」

「ああー。若いからっつていう都合のいい考え方で」

「うん。そうそう」

（おい。自分の親の悪口を言われてんだから、そこは否定しなよっ！っていうか、残り私の出番ってもうないんじゃないのっ！私の……。私の……。出番は）

私がぐしゃっと本をつぶす勢いで本を持っていると、窓のところからコンコンという何かでたたかれていて音が聞こえた。私が立ち上がってそちらに向かうと、今一番会いたくなくて顔も見たくない相手と遭遇してしまった。理由はこの人が来てしまったら、自動的に今回の話が終わりを迎えてしまうからだ。私は窓の力を緩めて窓をがらりと開ける。

「すいません。あ、あの……。そこにいる奴らと呼んできてもらってもいいですか？」

「そこにいる奴らってなんですか？具体的に言ってもらわないと困るんですけど？」

どね」

「え？何俺……なんか、怒らせるようなことしたっけ？なんか、目線が怖いんですけど」

そこにいたのは肩からショルダーバッグを下げた露草欠（つゆくさかける）君だった。若干、私の威嚇した目線に怖じ気ついてしまっている露草君を遠くから目でとらえた花百合君は、「つゆくぼくん」と言いながらこちらに突進してきた。

私は反射的に華麗によけて、露草君は「ちよっーばっー」言葉が言い終わらない程度に言葉を漏らして、突進してくる花百合君を見事に受け止めて倒れた。倒れた衝撃で頭を勢い良く地面にぶつけた露草君は、「いっつたー」と野太い声を出してその場でゴロゴロと転がった。

「あはは。つゆたん、さっきのこの子の反応と同じで受けるんですけど」

「全然、ウケないからっっー」

「わあー。息ぴったりー。平野さん、さっきの君の写真と今のつゆぼんとツィショットの写真、あげよつか？記念だ」

「いいから、コイツに連れて帰れっっっっっっー」

その後、私は真由澄君から写真を二つとも受け取って、破り捨てました。

